

現システムの使い方と次期システムへの要望

金川和弘 (茨城大学)

• 現システムの用途

- 利用システム: 多波長データ解析システム
- ソフトウェアなど: CASA, Python
- 用途
 - ALMAデータの解析(キャリブレーション、イメージング)
 - MCMCを用いたパラメータフィット
 - Sparse modeling

• 次期システムへの要望

• バッチ型サーバの拡充

MCMCやSparse modelingなどは多数のコアを確保する必要があるためバッチ型サーバで行うことが望ましいが、現状バッチ型サーバが対話型に比べて少なく、多数のコアを確保することが難しい。バッチ型サーバが拡充されれば、対話型のジョブへの影響や他のバッチ型ジョブとの競合を避けることができると思います。

• NFSの拡充

現状のシステムでは低負荷のサーバが不定なためローカルディスクを使用しづらい。そのため、NFSの使用率の方が高く、そちらの拡充が必要だと思います。しかし、バッチ型サーバが拡充され、対話型のサーバの負荷が減った場合、ローカルディスクで代替できるかもしれません。